
大変だ

K_季本

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大変だ

【Nコード】

N7546W

【作者名】

K | 季本

【あらすじ】

会社での日常茶飯事。それは一体？

(前書き)

会社員なら誰でも経験する出来事を、3人の登場人物に語ってもらいました。楽しんでもらえるとうれしいです。

廊下の突き当たりには設けられている会議室で、二人の人間が密談を行っている様です。一人は、現場叩き上げの経験豊富な管理職という雰囲気です。もう一人は、中堅の技術者といったところでしょうか。

この二人、どうやら厄介事を抱えている様に見受けられます。ちよつと覗いてみましょう。

「……と言う訳で、開発そのものは計画通りに進めていけると思っています」

「うん、そうだね。僕も君の見方に賛成するよ。ただ、」

「あー。やっぱりこれですか」

「そう。どうしても、これを避けることはできないんだよ。何か手を打てるかと助かるんだが」

「うーん。私も色々と考えてはみたんですけど、これと言った妙案は浮かんでこなかったですね……」

その遣り取りの最中、突如、バン！と勢い良くドアが開けられた。会議室の入口脇には、表面には赤字で《使用中》、裏側には黒字で《未使用》と刻印された札を掛ける場所があり、今は《使用中》の表示になっている。目立つ場所にある上、字の色まで変えてあるから、普通の人なら直ぐに気づくものだが……

「あれ？ なに、使用中だったの？ いやー、悪い悪い」

この闖入者は、厚顔にも二人の話に無理矢理割り込んできた。状況などお構い無しである。

「やあ、課長代理と技術主任の組み合わせなんて、随分意味深だなあ！ 何の相談？ ワタシも混ぜてよ」

手近な椅子を引き出してドカッと腰を下ろした振る舞いは、その

場に加わるのが当然であると高らかに主張しているに他ならない。部下の側から上司に出て行ってくれと言える訳でもないが、居て欲しくない事は事実である。無駄だと分かっているにも、一言言いたくなる時は有るといふものだ。

「課長、急ぎの用件でしょうから部屋空けますよ」

「否否、大した事じゃないよ。えつと、何だつたつけ？ あれ、忘れちゃったよ！あはは。ま、いいいいいよ、その内思い出すだろうから。それより、二人で何の相談なの？」

課長代理の抵抗も空しく、課長は完全に居座りを決め込んだらしい。否、本当に自分の用件を瞬時に忘れたのかもしれない。何故ならこの人は、《切り替えの早さ》を売りにしているから。。。

「・・・今度のプロジェクトについて、彼と相談してただけですよ」
「おお、あの件ね。いやさあ、部長も興味津々でねえ。上手い事やつつけてもらわないとワタシも困るんだよ。ああ、でもトラブってしまったら何時でもワタシが頭を下げるから、気にしないで良いよ。で、何かまずいことでも起きそうなの？」

「いえ、課長代理と私とで計画を検証していただけです。機材や人員の面にも大きな問題は無いことを確認できました。ただ」

「何、何？」

「ああ、いいよ、僕から説明するから。課長、実は一つだけ問題が出そうなんです」

「え、それ、どういうこと？ 君ら二人に全て任せているから、大丈夫じゃないの？」

「進捗報告はプロジェクトの責任者が行うこと、とされているんです」

「へえ、然うなんだ。ああ、ワタシは気にしないから、君等のどちらかがやればいいよ」

「ですからそれは無理なんです。課長にやって頂かないと駄目、という制度なんですよ」

「ええ！ ワタシ？ 無理だよ、無理、無理。だって、何するの？」

具体的に良く知らないんだよ」

「え？ 先週私が課長代理経由で提出しました計画書、未だ確認なさってないのですか？」

「ああ、悪い悪い、忙しくってさあ。あ、そうだ。今から教えてくれない？ どうせいずれは教えてもらわないといけないんだしさ。おお、今、定時を過ぎたばかりだから、丁度いいや。少しくらい帰りが遅くなってもワタシは一向に構わないよ」

「課長、今日はスポーツクラブに寄られる予定ではありませんか」
無駄とは思いつつも、課長代理は敢えて儂い抵抗を試みた。

「ああ、大丈夫、大丈夫。たまにはサボってもいいから。いやあ、やっぱり仕事優先だよ、仕事優先！ 主任は説明が上手だから、まあ、2時間くらいあればワタシでも理解できると思うよ。ワタシは2時間くらい残業しても平気だから。じゃあ、早速始めてよ」

ここで、少しだけ時間を戻してみましよう。二人は、こんな遣り取りの最中でした。

「進捗報告は必ずプロジェクトの責任者が行うこと。当たり前的事なんですけど、この条件、我々にとっては堪ったものではないですね」

「本当、本当。あの人のことだから、計画書すら未だ読んでないよ。賭けても良いよ」

「ですかね。先週頭に提出してますから、2週間、店晒し状態だったということですか。ああ・・・」

「はあ・・・でもまあ、こうして二人でブツブツばやいていても意味ないよね。覚悟決めるか」

「そうですね。仕方ありませんよね」

「人は悪くないとは思っけど、人任せの割には出たがりだからさ、全く」

「進捗報告を自分がやると知ったら、其の瞬間から、我々にはレク

チャーという雑用が発生する。然ういう事ですね」

「的外れな質問ばかりして、こつちの説明は進まないだろうし。あ、それに、本番で、例の一方通行の説明をされては大変だから、原稿も準備しないとイケないか。やれやれ、えらく労力を食いそうだね」

「先ずは、計画書の内容を全部説明して！ でしょうから」

「ああ・・・ しかし何で課長の名前にしちゃったんだろう。気を遣ったのは軽率だったかな」

「いえ、責任者は課長代理以上という制度ですから已むを得ないですよ。出たがりの人を差し置いて課長代理の名前を書き込んだ申請書類を課長に回した日には、拗ねて手の付け様が無くなりますから」
「うーん。まあ、然うなんだろうけどね。繰り言になっちゃうけど、僕の覚悟が足らなかつたのかもなあ・・・」

そこに割って入ってきたのが件の課長さんだったという事ですか。会社勤めという稼業、色々大変ですね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7546w/>

大変だ

2011年9月17日03時26分発行